The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	特集「Open Educational Resources」にあたって
Author(s)	福原, 美三
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2013, 14, p. 3-3
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70347
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特　集

特集「Open Educational Resources」にあたって

福原 美三（明治大学）

2001 年に MIT が Open Course Ware のコンセプトを公開し、その約 10 年後、2011 年から 2012 年米国において大規模オープンオンライン講座 (Massive Open Online Couses: MOOC) が提供され、世界中に大きなインパクトを与えている。特に我が国においては OCW を含む OER についての認知度が必ずしも高くない（JOCW の調査によれば、２割程度）ことから米国において突然 MOOC のプロジェクトが突然出現し、大ブレークをしたかのような印象をもっている方が少なくないのではないかと想像する。しかしながら、上述のようにこの 10 年間にオープンエデュケーションの意味と効果についての理解が浸透し、さらにネットワーク環境や多様なモバイル端末などの学習環境に充実が相まって MOOC への期待が高まっていると理解すべきであろう。また、この背景には米国においても高等教育機会についての高コスト負担にもとづく不平等の問題、発展途上国における高等教育への期待と現実のギャップ、さらに世界全体での継続学習への期待拡大などがあると考えられる。 MOOC についてはトップ大学の世界的な頭脳獲得競争としての側面がある一方で、すべての学習履歴情報を蓄積し、その膨大なデータの分析に基づくあらたな教育的対応などの知見を得ようという教育分野における ICT 技術の本格活用による教育高度化という側面もあり、さらに MOOC コンテンツの蓄積が反転学習のための高品質な知識源となりうるという期待など多くの側面がある非常に可能性の高い枠組みである。一方で、高いドロップアウト率や継続性を保証できるビジネスモデルの確率などの課題が顕在化しつつあることも事実である。

日本ではまだオープン教育の取り組みについての認知・理解が不十分であり、特に高等教育に従事する教員の間でも主体的な理解という観点では未だ欧米に比べ遅れているといわざるをえない。近い将来この課題も克服され、多くの教員にとって主体的な課題として捉えてもらえることを期待してやまない。

今回、日本でのオンライン教育に関わる専門家による寄稿が実現できたという意味で、現時点での画期的な特集になったと考えている。

MOOC の将来展望を含む今後のオンライン教育のあり方について読者諸兄が一考するきっかけになれば幸いである。

・オープンエデュケーションがもたらす大学の改革と高等教育 2.0 ---------- 飯吉　透　5
・MOOC の現状と展望 ---------- 重田　勝介　11
・Open Educational Resources の最新動向と将来展望 ---------- 福原　美三　17
・著作権とライセンスから見た Open Educational Resources の未来 ---------- 渡辺　智暁　23